

# 奥信濃の昔ばなし(方言編)

佐藤 厚

## 1. はじめに

4年前から本校で教鞭を執らせて頂くことになってから、方言に対する関心が高くなってきている。私自身、飯山で生まれ20歳まで育ち、これまで東京、大阪、横浜と移り住んできてはいるが身体に染みついた言葉は取れるはずもなく、ふと何かの拍子に出る言葉はいわゆる「飯山弁」である。たまに故郷に帰り、友人達と杯を酌み交わす時はもちろん、偶然にも都会のど真ん中で幼馴染に会った時などは「いやぁ久しぶりだねがえ。」「おめこさ、どしたん？どこえぐのお（行くの）？」「ちっと仕事ださ。」「こんだ（今度）、飲まねかえ？」「いいさぁ。」「ほじゃ、電話すっから番号おせえてくんねかい。」「はいよぉ。」「ほじゃ、また会おうさ。あんばぁ。」と、こんな具合になり、そこがどこであろうと飯山弁ワールドが展開されるのは言うまでもない。しかし、TVはもとより、今日の加速度的に発展するネット社会では、一律化される日常生活において「方言」までが「共通語一律化」され、消滅しつつあるように思われる。少々回帰的思考なのかもしれないが「方言」のもつ温もりは、衣、食、住を含んだ独特の地域文化に根ざしているので、「方言」の崩壊は地域文化までも無くなっていってしまいそうではない。

そこで、今回は「奥信濃の昔ばなし（1～5巻）」岡田千春：再話・編集をもとに、（ほとんどが方言で編集されている）その中でほぼ共通語で語られているもの五編を「方言」で書き表してみた。語尾などは昨今（2009年現在）主に使用されているであろう「方言」も織り交ぜてみた。「方言」も時代と共に緩やかではあるが変化していく部分もあるので、そのあたりも楽しみながら書き記したい。

そして、「居酒屋談議」。2007年冬。飯山。とある宴会場。30から60歳代の男衆8人

ほどの酒宴の際に交された会話を断片的ではあるが集約してみた。多少簡略化してあるが現在の「飯山弁」の姿が垣間見える。私自身を含め、今後も継承していきたい「方言」の数々である。

## 2. 作品集

### 1. 仁王門の力石（怪力小市兵衛）～2巻 第3話～飯山市小菅

小菅のとなん（隣）に前坂（野沢温泉村）という部落があらさな。昔さ、そこに小市兵衛てせう（と言う）小せえ男がいたんだっチャ。

ある時、飯山の町へ遊びい（遊びに）行って、田舎相撲を見てたんだっけんども、そのおもしろえ勝負ば見て、思わず笑ったんだっチャ。そしたら、相撲とりが、

「なんだ、こんなちいせえくせに、人の相撲ば見て笑うっチャあ、なんだや（何ごとだ）。おめえも上がって、相撲とれさ！」てせう。小市兵衛は困って、

「いやあ、おらなんか力ねえし（無いし）ちいせからとでもだめださ。」てせうのを、無理に引っ張りあげられて、いっぺえの（沢山の）見物人の衆のめえ（前で）、さんざっぱら（さんざんの）恥かかされたっチャ。

やっとのこんで（やっとのことで）けえって来た（帰って来た）小市兵衛は「こんなじゃ（これでは）男と生まれてんのに、えらい（余りに）みじめじゃしねか（みじめじゃないか）。どしたって（どうしても）人並みのちからん（力に）なりてやさ」て、小菅の仁王さんに願かけしたっチャ。

三七二十一日の間、真剣なって毎晩毎晩願かけして、そんな時に（その時に）必ず、麻の緒ば一束ずつ持ってきちゃあ、仁王さんにお供えしたん。そしていよいよ二十一日目の満願の日に、小市兵衛は、仁王門でうとうと居眠りしてたっチャ。したら（すると）夢枕に仁王さん出てきて、「えらい（そんなに）真剣に力欲しいんだら、おめに力つけてやらさ」って。

目え（目が）覚めた小市兵衛は、いい夢みたさ、と喜んで庭へおりてみたら、足が地面にめりこんじまって、さっぱうんまく（どうにもじょうずに）歩けねやさ。「こんなじゃ（これでは）えらい力がつきすぎだあ」てんで（ということで）また、「仁王さん仁王さん、そんないっぺえの（たくさんの）力はいらねんだ。人一倍の力ばくん

ねえかい（下さい）」て、もっぺん（もう一度）お願いしたてん。

少し経って、どんだけ（どれだけ）力ついたっそ（ついたらろう）思って、二十一日の間持ってった麻の緒の束ば、手でねじってみたらさ（ねじってみたところ）簡単にひっちぎれる（引きちぎれる）ほど力ついたんだっちゃ。そうしてさ、小市兵衛は仁王さんから力ば授かったんさ。そんで（それで）仁王さんにどうかして（なんとか）恩返ししんなきゃなんねやさそ（しなければならぬと）思って、前坂からでっけえ（大きい）石ばしょって来て、お礼として門前に建てたん。それが今、仁王門の下にあるでがい（大きい）野石だせわれてる（言われている）。

小市兵衛は、授かった力で、色々村のためんなることば（為になることを）したさ。前坂の赤滝川へ、でがい一枚岩で橋ばかけたりしたてん。ほうしたら（そうして）村の人らにえらく喜ばれたんだっけんども、そのうちにゃ仁王さんから授かった怪力のありがたみばわすんて（忘れて）えぼってばっか（威張ってばかり）になったてん。そのうちにゃまたえらくわがまん（我ままに）なってさ、村の人から厄介もん（者）にされたっちゃ。

そうすつと（そうなると）仁王さんも困ちまあさなあ（困ったものだ）てんで、小市兵衛が赤滝川にかけたでがい石橋が、ある日突然落っこちたのとえっしょに（落ちたのと一緒に）、小市兵衛の怪力も急に落っこちまったんだっちゃ。そればっか。

## II. 川中島合戦と飯山～2巻 第六話

### ・大将陣と笹ずし 飯山涌井

富倉峠の北山に、大将陣と呼ばれるてえらな（平らな）ところがありやすで。（ありますよ）

この辺はむかしゃ（昔は）、しばっ原で（芝原）上杉謙信が出陣の時、陣屋を張ったところだったんだっちゃ。そんときゃ（その時は）野戦ださ、茶碗も箸もねぐて（なくて）まわんにえっぺ生えてる（近くに群生している）笹で飯ば包んでさ（飯を包み）、えらく（とても）重宝したってせわさ。（重宝したといいます）そんな時から（その時から）、この地方に、笹ずしが生まれたせわれてるんだっちゃ。（生まれ

たと言われています)

・綱切りの渡し 飯山市飯山

中野から飯山への東の入り口にゃ (には)、千曲川にかかる綱切橋がありやす。この橋のなめえ (名前) の由来にゃ、次のような話が伝わってらさ。

永禄四年九月、川中島の合戦にやぶんた (敗れた) 上杉謙信は、武田勢の追撃ばのがんて (逃れて) 家来とただふたんで (二人で) やっとのこんで (やっとのことで) 間道を川田から保科の山道ば来てさ、山田ば越えて今の中野市の間山から更科の部落に來たんだっちゃ。ほしたらさ、ひとんの (一人の) 年よりゃえてさ (老人がいて) 「こっからさきゃ (ここから先は) おらが案内申しやすで。(私がお案内申します)」と前でのほうに (先に) たったっちゃ。(立ちました)

中野から夜間瀬に出て、高社山ば左に見てさ、えのくびやま (犬首山) の間から、須賀川ば通って木島にでたっちゃ。年よりゃ「おらぁ、ここでお別れいたしやすけんども (お別れいたしますが)、川ば渡って越後さけえっておくんなして。(お帰り下さい) こっからさきゃ (ここから先は) 小菅権現様がお守りいたしやしょう。」そうせって、(そう言って) 姿ば消しやした。

謙信は信仰厚い小菅山に入ろうとしたんだっけんども、年よりのせう通り (言う通り) 千曲川ば渡ることにしたさ。安田の渡しば船で着いたけんども、あとで船頭が敵に知らすんとだめだらすもって (知らせたらまずいと思って)、水面に張り渡さんた (渡された) 大綱ば切り、船ば渡さんねえようにしてっから、主従ふたんで (二人で) 無事春日山に帰り着いたんだっちゃ。

その後さ、この渡しば「綱切りの渡し」せうようになったんだっちゃ。(と言うようになりました) <「北信濃の歴史」による>

・鬼が峰 飯山市笹川

旭地区の東寄りに、こだけえ丘が (小高い丘が) なだらかな斜面ばつくって、このへんば変ったふうにしてんだけんども、この丘ば人らは「鬼が峰」てせう。鬼が峰せう、おっかねえ名ついたっちゃぁ (ついたのには) こんな話があるってえで。

(あるということです)

川中島合戦にやぶんだ(敗れた)上杉勢が、越後に引き上げる途中、このへんばとおったせう。上杉方の武將に小島弥太郎せう、えれえつええ(とても強い)人がえたさ。(いました)鬼のようにつええせうんで(強いというので)村のしょ(衆)は鬼小島弥太郎せって、おっかねがってたっちゃ。(恐れていました)

こん人が(この人が)、引き上げる上杉方のいっちゃん後ろば(一番後ろを)守って、武田軍の追手と戦ったんだっちゃ。上杉方はやっこのこんで(やっこのことで)逃げ、この丘まで着いてさ、後ろばふりけえってみんと(後ろを振り返ってみると)鬼小島弥太郎の姿が見えねっちゃ。(見えません)弥太郎は、へえ(もう)飯山の市の口せうとこで、討ち死にしたんだっちゃ。上杉方の武士達「鬼ゃ、見えねぐなつたでえ。」で大騒ぎしてさ、鬼小島の戦死ば残念がったっけん(残念がりましたが)、こん時の「鬼ゃ、見えねぐなつた」が訛って、「鬼が峰」て峰の名がついたせわれてる。

そんで、鬼小島弥太郎の墓は、飯山の市の口、長峰の麓、英岩寺境内に残ってるっけん、(残っていますが)史実的にゃはっきりしてねえってえやさ。(はっきりはしていません)

### Ⅲ. 鬼ばくち~4巻 第11話~ 下水内郡 栄村屋敷

昔あったっちゃ。夫婦もんが住んでん。子どもも年よりもいねぐて(いなくて)「あと継ぐもんもしかたもねやさ(後を継ぐ者も方法もない)。死にゃあ鬼んとこいぐしかねやさなあ(行くしかないなあ)。」そもって(と思つて)鬼の像ば彫ってさ、一生懸命拜んでたん。旧正月の十五日の夜、突然その鬼あもの言い出したんだっちゃ。「おめたち(お前たち)夫婦はわけえのに(若いのに)よくこのおれば拜んでくるなあ(拜んでくれるなあ)。なんか礼ばしてえけんども(お礼をしたいが)見たとこ、えらい貧乏で困ってるようだしねえがい(困っているようじゃないか)。今日は、おめにばくちばおせえてやる(お前にばくちを教えてやる)。おらがさいころん(に)なって、おめが「長」せえば(と言えは)「長」、「半」せえば「半」になってやらさ(なってやろう)。振っ立てる時に、みんなの張り方ば見て、自分の思った目ばせえ

(言え。)」って。

男はえらい喜んじまって、やったこともねえばくち場へ行っさ。

せわれた通りやると、金はえっぺえ (いっぱい) 集まり、えらぐ (すごく) もうかったっちゃ。頃合いは見計らって、男が、

「えっぺえ鬼にでれ」ってせって、さいば振ると、突然でっかい鬼が出てきたん。そこにいたしょは (そこにいた衆は) えれえびっくらこいて (とてもビックリして) 持ってた金銭ば投げ出して、逃げだしたってえやさ (逃げて行ってしまったそうな)。

おかげで夫婦は、えらぐ金持ちんなってさ、一生安楽に暮したんだっちゃ。

それっきり。

### 3. 居酒屋談議

A : (50歳代、店の人に) こんちわー、せわん(世話に)なりやす。こっちでええかや？

(4~5名入る)

B : (60歳代年長者) おめさんたち、そっちのほうえげさ。(そちらの方に行きなさ)

C D E : (30歳代年少者達) え〜、おれた (俺達)、そんな上座じゃわりだんかえ。

(悪いです)

A : いいさあ。まあ遠慮しんで (しないで) 座ってくんなして。(下さいな)

D : そじゃ、もうしゃけねやさ。(申し訳ないです)

B : ええがら、ええがら。(いいから、いいから)

A : まあ今日は、みんなして、まあんず(とても)良くやってくれたさ。ごころさんでやんした。(ご苦勞様でした) まあ、いっぺやってくんねかい。(一杯飲みましょう)

E : そうどこじゃねえ。(とんでもないです)

(本来は、冗談じゃない、言われるまでもない等の意となるが、謙遜した言い方に变化して使用する時もあるようだ。)

F G H : (40~50代) こんちわー、おせぐなりやしな。 (遅くなりました) 皆、えるかや? (いるかな)

G : おーえたえた。(いたいた)

H : わりなえ (悪いね) おそくなっちゃまって。(遅くなっちゃって)

F：先、やってらったかい？（飲み始めてましたか？）

B：えーまだださ。（いや、まだだよ）わけしょ（若い衆）皆、まってらったでえ。（待ってましたよ）

G：そうかえ、もうしゃげねえ。そじゃ、おねげえしやす。（お願いします）

B：今日は皆さん、ありがとごんした。今年ゃゆぎ（雪）すくねぐて（少なくて）心配したけども、なんとか雪像もできやした。（できました）きんな（昨日）から寒じてきたさけ（寒くなってきたから）、へえ（もう）大丈夫ださな。明日もおねげえしやす。

乾杯！

—しばらく談笑—

C：だけん、（けれど）きんなは、どうなるかそもったでえ。（どうなるかと思ったね）

D：そうなあ。

C：集めてきたせう（集めてきたという）雪は、ザラメっぽくなるしさ、午後ぬくてく  
なったらさ（暖かくなったら）雪像の右っぺたの（右側の）腕もげて、おったさ。  
（落ちたよ）

E：そうそう、やだくなっちゃあさなあ。（いやになっちゃうよな）

F：くずんたの見てさ、（崩れたのを見て）ちいせえ子（小さい子）おっかねせて（怖いと言って）どっかいっさ。（どこかへ行ってしまった）

—子どものことから、各家族の話題に…—

A：そういや（そう言えば）Dさんちじゃ、子どもどんなだえ。（どうですか、元気ですか）

D：やっこ、ハイハイし出して、目えはなさんねやね。（目が離せませんね）危なくて、しょうねやさ。（仕方ないですよ）

E：わにねかえ？（人見知りはない？）

- D：ちっとな。(ちょっとね) おめんとこは? (あなたの子は?)
- E：おらちんのは(うちの子は)えらくわにてさあ。まいっちゃあさ。(困ってしまうよ)
- B：まあ、いんだねえがい。(良いのではないかな)とうちゃとかあちゃぼ (父さんと母さんを) 好きだせうことださ。(好きだということだよ) じゃんじゃんに慣れてくらす。(だんだん慣れてくるよ)
- A：かあちゃんに、しんべすんなせつとけや。(心配するなと言っておきなよ)
- G：そういやHさんち、受験だねえんかえ? (受験じゃなかったかな?)
- H：そうなんださ。(そうなんですよ) でも本人さっぱ(さっぱり)勉強しねやさ。親の方が焦ってらさね。(焦ってしまいますね)
- G：えー、そのっくんのほうがいいんださ。(いやいや、そのくらいの方が良いんだよ)
- H：そうかやあ…。(そうかなあ)
- G：そうならず。(そうだろう)
- B：親あ焦ったって、しょうねやさ。(仕方ないよ)

—終宴の頃—

- A：ほじゃ(それでは) 年寄ゃ先、けえるで。(帰るよ) あと、わけしょ、あるをつくしてな。(出ている酒や肴は残さず召し上がれの意。)
- CDE：ごっつおさんです。(ご馳走さまです) ありがとあんした。(ありがとうございました)
- F：ほじゃみんなして、つきいぐかえ? (では、みんなで次行きましょうか?)
- E：いぐっちゃ、おら先とんでって見てくらす。(行くなら、俺が先に走って行って見てきますよ)
- G：Eさん、いっつもあーださ、ずくあんなえ。(いつもあんなふうに、ずくがあるねえ)
- 店の人：雪えっぺ (いっぱい) 降ってきたで。さぶくねえように、支度してえっておくんなして。(寒くないように、身支度をして行って下さいな)
- みんな：おせわさ〜ん (お世話になりました) ありがとー。おーさびさび。(寒い寒



い) 等々

一雪の飯山の夜は長い一

#### 4. おわりに

日常の会話での「方言」は、ほんの微妙なニュアンスの違いが、語尾に変化がでる。「方言」を体系付けて頂いた先生方の資料を参考に、今後はできればネイティブな語りを収録していければと思う。民話をもとに、「方言」を後世に伝えていくことと共に、その「方言」はどんな音声や抑揚、感情表現なのかを語り伝えていきたい。その方法として、民話の方言朗読や、地域に根差した話題をもとに、ドラマ化したもの等(もちろん方言の台本で)を朗読劇手法を用いて、かしまらず舞台表現していけること等も模索、実践していくことが、故郷の言語や地域文化を継承していく術となろう。

#### 【付録】

かつて「フォークソング」が流行っていた頃、冗談半分で「飯山弁で歌ってみたら、どんななるかっそ？」と、友人たちと共に訳して？みた。以下に「飯山弁」のみの歌詞を載せる。有名な曲なのですぐにお分かりいただけることと思う。

♪ わー へえー わすんたかあ  
赤い てのぐい えりまぎにして  
ふたんで えった よこちょの よ  
一緒に でねがたって せったのに  
いつも おらが またさんた  
洗い髪が ちべたくなってえ  
ちくせえ 石鱈 かたかた なった  
おめは おらの からだば だいて  
ちびてえなって せったのよ  
  
わけかあった あのころ

なんも おっかねぐ ねがあった  
ただ おめの やさんさが  
おっかねかあった～ ♪

**【参考文献】**

- ・奥信濃の昔ばなし（1～5巻）岡田千春：再話・編集 飯山振興公社：発行
- ・おもしろ方言学 大橋敦夫 「文化の諸相」上田女子総合文化学科
- ・方言よもやま話—信州方言とそのおもしろさ—  
「文化の諸相」上田女子総合文化学科
- ・奥信濃の民話 高橋忠治 信濃教育出版会
- ・飯山の伝説百選 岡田千春 飯山市教育委員会
- ・信濃の昔話 岩瀬博ほか 日本放送出版協会